

AIを用いた楽曲制作に関する検討

1532117 秋場 翼

1532151 松元 孝樹

指導教員：中村 直人 教授

平成31年度

目次

第1章	序論	1
1.1	研究の背景と目的	1
1.2	本論文の構成	1
第2章	理論	2
2.1	AIを用いた楽曲作成	2
2.1.1	MIDI	2
2.1.2	Magenta	2
2.2	開発環境の構築	3
第3章	実験内容	4
3.1	モデルによる違い	4
3.1.1	MelodyRNN	4
3.1.2	PolyphonyRNN	4
3.2	学習回数による違い	5
3.3	ノード数による違い	5
第4章	楽曲制作	6
4.1	MelodyRNN	6
4.1.1	BasicRNN	6
4.1.2	LookbackRNN	6
4.1.3	AttisionRNN	6
4.2	PolyfonyRNN	6
第5章	結論	7
5.1	今後の課題	7
	謝辞	8
	参考文献	9

図 目 次

2.1	magenta による MIDI 音楽データ生成までのプロセス	3
-----	---	---

表 目 次

第1章 序論

1.1 研究の背景と目的

近年，AI 分野は急速な発展を続けている．スマートスピーカなどの対話型の AI が Google や Amazon によって商品化され，現在ではスマートフォンにも搭載されるなどその存在は非常に身近になっており，その種類も非常に多岐にわたる．

また囲碁や将棋などの競技においても，プロに勝利するなどその精度は高くなっており，その成長は著しい．芸術の分野ではまだ発展途上ではあるが，絵画や音楽に関しても AI を用いて新しい作品を作るものが出回っている．

このように AI の発展は様々な分野においてその成果を上げており，今後は業務の効率化や補助だけにとどまらず，自動車の自動運転や医療の現場でも人間の手よりも高精度なものとして活躍することが期待されている．

本研究では AI による楽曲生成についての実証実験を行う．Googole brain によって公開されている Magenta を用いて学習データやノード数による楽曲の生成結果の違いを比較，検証し，AI による楽曲制作が有用なものか調査する．

1.2 本論文の構成

本論文の構成は以下の通りである．

第1章では本論文の背景と目的について述べている．

第2章では本論文で利用する理論について述べている．

第3章では実験内容について述べている．

第4章では楽曲制作について述べている．

第5章では AI を用いた楽曲制作についての本研究の結論について述べている．

第2章 理論

2.1 AIを用いた楽曲作成

2.1.1 MIDI

AIによる曲制作では主にMIDIファイルの音楽データを使用する．MIDIファイルには実際の音ではなく音楽の演奏情報（音の高さや長さなど）である．本研究で用いるAIはこのMIDIファイルの情報を元に学習をする．また入出力の際もこの規格を用いる．

2.1.2 Magenta

本研究ではMagenta[1]を使用する．これは音楽などをTensorFlowを使って機械学習するライブラリであり，Google BrainがGitHab上に公開している．Magentaではまず学習させたい音楽のMIDIデータをファイルに格納しNoteSequence（magentaが扱うファイル形式）に変更する．それを学習用データセットに変換したあと学習を行う．このとき，一度に学習させるデータの数，学習を行う回数，ノード数を設定する．これをパッケージ化し，MIDIファイルとして新たに楽曲を生成するという流れである．これを図2.1に示す．

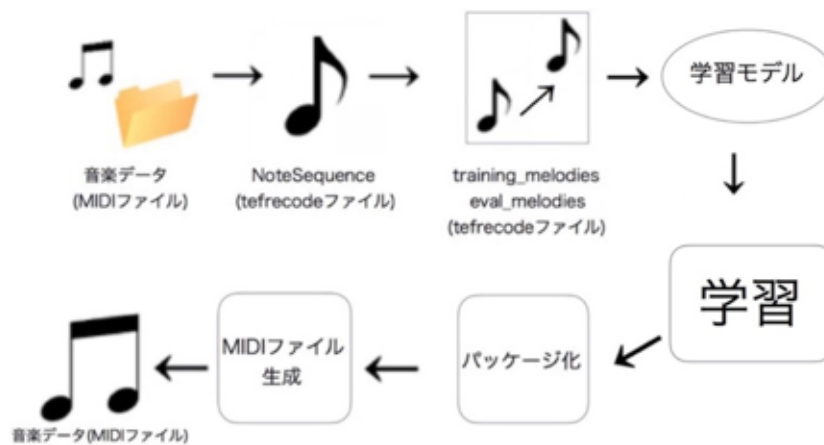


図 2.1: magenta による MIDI 音楽データ生成までのプロセス

2.2 開発環境の構築

開発環境の構築にはコンテナ型仮想環境を提供するオープンソフトウェアである Docker を用いた。

Docker には仮想環境を配布可能な形にする事ができる DockerImage があり、その Image を用いる事で同一の実行環境が作成できる。また、クラウド上で DockerImage を配布できる DockerHub というサービスがあり、そのサービス上にすでに Magenta の開発環境を構築済みの仮想環境があるため、その環境を今回は利用した。

第3章 実験内容

3.1 モデルによる違い

本研究では Magenta で用意されている 2 つの学習モデルを用いた。以下に示すモデルを用いて楽曲制作をそれぞれ行い，比較，検証する。

3.1.1 MelodyRNN

MelodeRNN は楽曲のメロディを制作するモデルである。MelodyRNN である 3 つのモデルを以下に示す。

(1) $basic_{rnn}$

前の状態を保持し，これを記憶または忘却する。時系列を学習することにより，次の音の予測を可能にしている。 $Lookback_{rnn}$ と $Attention_{rnn}$ はこれを基に機能を追加したものである。

beginfigure[!ht]

magenta による MIDI 音楽データ生成までのプロセス

(2) $lookback_{rnn}$

$Basic_{rnn}$ を基に，1 小節前と 2 小節前の音，拍数，前の小節の繰り返しかどうかの情報を与え，音楽の流れを掴もうとするもの。

(3) $attention_{rnn}$

$basic_{rnn}$ を基に，過去の情報を予測結果に加えてこれによる繰り返しを捉えるもの。

3.1.2 PolyphonyRNN

複数の同時音のモデリングが可能になっており，複数音の響きを 1 つのかたまりとして捉えて学習しているモデルである。このモデルを使用することで，伴奏も含めた

楽曲の生成が可能である。

3.2 学習回数による違い

3.3 ノード数による違い

第4章 楽曲制作

4.1 MelodyRNN

4.1.1 BasicRNN

4.1.2 LookbackRNN

4.1.3 AttisionRNN

4.2 PolyfonyRNN

第5章 結論

5.1 今後の課題

謝辞

akakakakakaakkaka

参考文献

- [1] Magenta, <https://magenta.tensorflow.org> .